

エコミュージアム

NPO法人朝日町エコミュージアム協会 理事
西澤信雄



はじめに

エコミュージアムは、一九六〇年代後半にフランスの博物館学者アンリー・リビエール氏によって考えられました。その考え方が、日本に紹介されたのは、一九九〇年前後で、まさに、パブルのピークでもありました。地域開発の切り札は大型リゾート開発だと、ゴルフ場、スキー場、リゾートマンションなどの施設型開発が盛んに行なわれていました。しかし、大規模な開発や、地域の環境や地域の独自の文化を大切にしない開発は、各地で問題も抱えていました。そんな時に、エコミュージアムは日本にやってきたのです。

エコミュージアムとは何か

リビエールの、エコミュージアムの考え方を少し詳しく述べると、その目的を「行政と地域住民が一体となって、地域の生活と自然及び社会環境の発達過程を史的に探求し、自然及び文化遺産を現地に於いて保存し育成することを通して、その地域の発展に寄与すること」としています。

従来の博物館が、自然や文化財の保存という後ろ向きな保存型過去指向博物館であったのに対して、エコミュージアムは生活型未来指向博物館です。そのため、エコミュージアムが対象としている歴史、文化、社会、自然環境は地域の人びとの生活から切り離されて存在する物ではなく、地域に点在する、文化財、産業、生活スタイル、自然、風景、そのどれもが、この博物館の展示物であり、そこに生活する人びとも、学芸員となりこの博物館に協力し、地域の発展に寄与する人びとです。

またエコミュージアムの任務は、第一に地域の人が地域のことを考えるための研究所であり、第二に地域

の自然遺産、文化遺産、産業遺産等の保護と育成のセンターであり、第三に地域の人が地域を学ぶための学校であるといわれています。

日本でエコミュージアムをどう生かすか

日本では、エコミュージアムの考え方はいろいろな形で、現在多くの場所で地域づくりに取り入れられています。もちろんエコミュージアムと名乗るところもありますが、「町ぐるみ博物館」「屋根のない博物館」「まるごと博物館」「ライブミュージアム」「フィールドミュージアム」「田園博物館」などの名前で広まっています。

なぜ多くの地域で、エコミュージアムの考え方が、取り入れられたのか、それは、一九九〇年代後半からのパブルの崩壊と、都市と農村の地域間格差の増大、環境意識の高まりなどと考えられます。さらに、エコミュージアムの考え方のなかに、これからの日本に必要な考え方がすべて入っていることだと思えます。そのいくつかを、個人的な解釈で述べてみます。

① 地域のよさを、住民が学び、見直すことが大事

エコミュージアムでは自分たちの住んでいる町や地域、テリトリーを見直すことからすべてがはじまります。その自然環境、文化教育、歴史伝統、産業生活などを自分たちで、理解し、再発見し学ぶことや、伝えることにより、地域のアイデンティティを獲得することができのです。

② 意識改革と人づくりが地域づくりの基本

都会を真似たり、画一的な発展を望まないで、もう一度自分たちの町にあるものに真剣に目を向けることです。

今までの地域づくりが「土木型行政主導ハコモノ開発」であったのが、近年は「生涯学習型民間主導人材開発」に変わってきています。それは、すなわち、住民自身が、自分たちの地域を学ぶことで、地域を知り、地域を愛することになり、地域づくりの人材を育てていくことにつながっていくのだと思います。

③ 年寄りには地域の宝物、知恵と人材を生かすこと

伝統的博物館では、建物や収集できるものを遺産として扱ってきましたが、エコミュージアムでは、人間は自然と社会のなかで生きる主体であり、同じ伝統、同じ状況や技術、同じ生産物とおして集まる人間の

共同体を語る物語の主人公として大切にしています。すなわち、お年寄りが日々の生活で蓄えてきた生活文化や、生活の知恵までも、文化遺産として大切に伝えていこうという考え方で。

④住民が、ボランティアとして町づくりに参加する

エコミュージアムでは「町全体が博物館、住民は全員が学芸員」と考えます。住民は、地域にあるいろいろな自然、文化、歴史、産業などの、専門家であり、学芸員でもあります。さらに、地域内や地域外から来る多くの人や、子どもたちに、自分の知っていることを伝える地域の先生でもあります。地域をよく知る人の積極的な発言は、地域づくりにとって非常に大切なことです。

⑤一つの宝物に捕われず、ネットワークを大事にする

今までのように、地域にある大きな宝物を一つだけ取り上げて単一な地域づくりをすることなく、地域にあるすべての、小さなことだが地元の人が愛着をもって残してきたことの一つ一つに目を向けて、取り上げ、一つのアンテナとして、光を当ててつなぐことよって地域づくりに生かしていくのが、エコミュージアムの考え方です。それはまた、多くの人が、意欲的に、

好きな分野で、地域づくりに参加できる方法です。

⑥住民を主体にした、行政の協同作業が大切だ

エコミュージアムでは、重要なことは住民と行政が、同じ目的に向かって、おのおの立場で、役割を果たすことです。住民は、地域をいつまでも愛する知恵と情熱と継続力があり、行政は資金や資材や情報がある。それらを出し合うことで住民が主体の地域づくりが可能になるのです。すなわち、公共性の追求における、住民と行政の「二重入力システム」がうまく機能することを、エコミュージアムは一番大切にしています。

⑦地域の問題は地域で考えるのが重要です

エコミュージアムは地域の発展に寄与する博物館です。地域のことは、地域の人で考えようということです。地域で、住みつづける人は、開発や、実施した施策の結果の責任を負いつづけるべきではありません。都会のコンサルタントや官庁で考えられた計画は、

つくるまでがすべてであり、でき上がってから起こる問題の責任は背負わないものです。すなわち、失敗も成功も責任をもちつづけるべきではないのは、地域に住みつづける人たちなのです。だとすれば、地域のこととは、地域に住む人自身が考えようということです。

山形県朝日町のエコミュージアム

朝日町は、山形県の中西部にあり、磐梯朝日国立公園山麓にあります。面積は、一九七万km²で最上川が中央を流れています。人口は、八七〇〇人です。

わが国ではじめて発見された旧石器といわれる「大隈遺跡」があるほか、文化財としては国指定の名勝「大沼の浮島」、国指定の重要文化財「佐竹家」、県指定の文化財「豊竜神社の大杉」があります。河岸段丘の肥沃な農地を生かして、リンゴの生産が盛んで、無袋ふじリンゴは品質において、高い評価を受けています。

雪の多いこともあり、スキー場も兼ねた町営家族旅行村とホテル「自然観」があります。ユニークな施設として、空気に感謝する「空気神社」があり、地球規模での自然と人間の共生の観点から「地球にやさしい町宣言」や「空気の日」の制定も行ないました。

エコミュージアムについては、一九八九年民間人と職員で「朝日町エコミュージアム研究会」で設立され、エコミュージアムを「楽しい生活環境観」と意識し、

生活と環境を大切に、みんながいつまでも楽しめる町づくりを提唱しました。その結果一九九二年には、町の総合開発基本構想の理念として「楽しい生活環境観・エコミュージアムの町」づくりをめざすことになりました。

さらに二〇〇二年以降から現在までは、町づくりキヤッチフレーズ「自然と人間が共生し、しっかりと暮らしを築く、エコミュージアムのまち」を掲げ、エコミュージアムの考えを大切にしながらすすんでいます。

この間、エコミュージアムを具体化するために町民一〇名でフランスのエコミュージアムの視察を行なうとともに、視察先から専門家を朝日町に呼んでの二度の「エコミュージアム国際会議」を実施し、理解に努めました。その後は、毎年一カ所ずつ町内の遺産のある地域で、遺産を取り上げた行事、シンポジウム、劇、人形劇、音楽会、神楽、舞楽などを町内の各種団体と協力しながら実施してきました。埋もれていた遺産を、地元の住民とともに掘り下げ、楽しくわかりやすく行なう行事は、多くの地元からの参加者を集め、地域を見直し、誇りをもつきっかけになりました。そのなか

「持続可能な地域づくり」のキーワード

農村と都市の交流をすすめる

から、見直された石器や、復元にこぎつけた雅楽、新しい人形劇の誕生もあります。
また、地元の中学生に自分たちの住む地区の自然環境や文化財を調べ、地区の宝物を選んでもらい五三枚の「町の宝物」エコミュージアムカルタにしました。このカルタは、町内の小学生のいる全家庭に無料で配布され、カルタ大会も実施されました。現在も、小学校に入学した子どもたちに毎年配りつづけられています。

町民自身が、町内の各遺産を案内するため町の案内人養成講座も開催され、講座受講者による「町の案内人（エコミュージアムガイド）の会」も設立され、現在も町内、町外の見学希望者に対応しています。

二〇〇一年に朝日町エコミュージアム研究会は、山形県では初めての地域づくりを目的とする特定非営利活動法人の申請を行ない「NPO法人朝日町エコミュージアム協会」として衣替えをしました。

同じ年に、図書館、文化ホール、公民館、エコミュージアムセンターを兼ねた施設ができ「創遊館」と名づけられました。この、エコミュージアムセンターの部分をNPO法人が、管理受託し、現在もここを基点

に、エコミュージアム活動を続けています。

本年度のメインの活動を、最後に少し書いてみます。平成十八年度は「おらほの最上川学、朝日町五百川溪谷編」として朝日町の中心を流れる最上川五百川溪谷に、いろいろな角度から光を当てる活動を実施しました。行事は、全五回で「成り立ちと地質」「船運と交易」「昔の築場と釣りの魅力」「開削の歴史」「溪谷の水質浄化」「カヌーイストから見た魅力」等と、地元の講師を中心に多方面から取り上げることができました。行事のなかには、最上川の現地を歩いたり、投網を打



エコミュージアムセンター「創遊館」入り口

ったり、釣れた鮎を食べたり、カヌーの体験や最上川クリーンアップ大作戦をしたりと盛りだくさんでした。これらの各活動は、ガイドブック「エコミュージアムの小径」

にまとめられる予定です。

おわりに

一九八九年十数名の有志と「エコミュージアム研究会」を立ち上げて、資料もなく、何も分からないなか、フランスのエコミュージアムの現地を見ることから初めて、故新井重三先生の指導と協力で、エコミュージアムを具体化しようとしてきました。現在も、幸いなことに、仲間の若い人たちが頑張ってくれています。なかなか先の見えない活動ですが、「エコミュージアムは時代と場所でいつも変化し、歩みつづけていくものである」と、リビエールは書いています。

日本エコミュージアム研究会ができて二二年、全国でもさまざまな地域や、環境のなかでユニークな取り組みが、多くの人たちの力で進んでいます。エコミュージアムの全国大会も毎年各地で行なわれています。これからも、さまざまな形で広まっていくことだと思います。

私は、エコミュージアムの考え方は「環境」「自然と文化」「住民参加」「生涯学習」「地域づくり」「ボラ

ンティア」「生きがい」「ネットワーキング」「持続的開発」「環境教育」など、これからの日本を考えるキーワードをいくつかも飲み込んでいると思います。きっとエコミュージアム運動が、これらの問題に何らかの役割を果たす可能性があると思います。



「おらほの最上川学」と銘打って開かれた五百川峡谷シンポジウム（2006年）

●西澤信雄（にしざわ・のぶお）氏・プロフィール

一九四八年生まれ。一九七五年より朝日町で朝日鉱泉ナチュラリストの家を経営。著書「朝日連峰山だより」（山と溪谷社）、「里地からの改革」共著、時事通信社、「エコミュージアム理念と活動」（共著牧野出版）ほか。